



# 雑草 無法植物の話

リチャード・メイビー

ブランカ・ヴァン・ハッセルト

雑草とは？タンポポ、キンポウゲ、デイジー、ポピー、ヤグルマギクなどの名前が思い浮かびます。雑草とは、生えてほしくないときに生えてほしくない場所に生えてくる植物、と定義してもよいかもしれません。地面を引っ掻き回した後によく生えてきます。長く休眠状態にあった種子が数十年の後に土壌の条件が整って芽を出すのかもしれませんが。著者リチャード・メイビーが述べているように、野菜、穀物、ライ麦、あるいは薬用やスパイスとしてのハーブなど、人々が栽培してきた植物と共に、雑草も進化してきました。栽培作物と同時に熟すようになり、種子の形や大きさも栽培植物のそれと同じようになっていきました。栽培植物と同じ性質をもつよう進化することで、雑草は生き延びることが可能になったのです。

雑草についての最初の記録、医療へ利用などについての章があり、除草技術の進歩についての章が続きます。原始的な引き抜く方法から、鍬の利用、近年の除草剤噴霧について述べられています。

それから、文学作品、詩などに登場する雑草について考察しています。シェイクスピア作品には数百種類の雑草が出てきます。例えば『真夏の夜の夢』には、パンジーから絞った液体を眠っている人のまぶたに落とす場面があります。その人が目覚めた後最初に目にした人を好きになる、という効果があるのだそうです。これは地方の民間伝承に基づくもので、シェイクスピアと同時代に生きた人々は、その言い伝えを知っていたと思われる。その地方ではパンジーのことを「なまけんぼうの恋の花」と呼ぶそうです。20世紀初めには、シェイクスピア作品に出てくる全ての植物が、ニューヨークのセントラルパークに植えられました。その次は、絵画に描かれている雑草についての章です。アルブレヒト・デューラーの『芝草』に描かれている大きなプランタンなどについて述べられています。

また、戦争にまつわる雑草の話もあります。フランダースの有名なポピーは、第一次世界大戦以来、その赤い色が、血に染まった大地や、大虐殺後の生命の再生を連想させます。第二次世界大戦でロンドンがドイツ軍による空爆を受けた後にできたクレーターには、紫のヤナギランの花の海が一面に広がりました。炎と消防隊の放水が種子の発芽に必要な温度と水分を供給したのです。紫のヤナギランは爆弾草と呼ばれました。爆弾の中にその種が入っていて生物戦が始まるのだという噂もありました。

帝国主義時代には世界中から植物や種子がイギリスに持ち込まれました。学術目的のものもありましたし、商用目的のものもありました。例えば工業用植物（ゴム）薬用植物（キノキ）あるいは観賞用の植物（ツツジ）など、イギリスでは知られていなかったさまざまな植物が持ち込まれました。一方、たまたま入り込んできた種子もありました。カナダ原産のヒメムカシヨモギは北米の鳥の詰り物として運ばれたものです。

リチャードはまた、イギリス内の植物の移動の跡をたどっています。例えばオックスフォードのフキは元々大学内の植物園に植えられていたものです（1794年）。その苗が壁を越え、いくつかの通りを越えたところで生育しているのが確認されました。1830年までにその生育場所は駅まで到達し、そ

の後、鉄道の沿線に沿ってその範囲を広げました。柔らかいうぶ毛に覆われた種子は旅行者の荷物にふわりと入り込んでそれぞれの目的地へと移動していったのです。最近では高速道路を走る車やトラックの流れに沿って植物の種子が移動することもあります。さらに、海岸近くにしか生息しなかった雑草が、冬に凍結防止剤としてまかれる塩のおかげで、道路沿いに現れることもあります。

もちろん、外来種の雑草はその侵入を抑制する働きをする捕食者がなければどんどん繁殖します。しかし、一方でゴミ捨て場のような場所でひっそりと生息するものもあります。リチャードは次のように述べています。

「ときどき私はイギリス諸島植物協会主催の『エイリアンハント』を行いました。これはロンドン東部周辺のゴミ捨て場を見て回ることです。そこは、リサイクルが一般的になる以前には、屠殺場の廃棄物からプラスチックのおもちゃまで、あらゆる種類のゴミが無秩序に投棄されていた場所でした。」

リチャード一行はそこで、キュウリ、ダリア、スイカ、トマト、さらにはコリアンダー、ソバまで発見したのでした。

一方、終末的未来をモチーフにした文学作品に描かれる外来種の侵入についても述べられています。『トリフィッド』という作品の中では、遺伝子操作された雑草が人間を食べる残虐な肉食植物に姿を変えます。この章でリチャードは外来種への考察を深めています。外国からの移民を受け入れるように、外来種に対して寛容であるべきなのだろうか。もちろん、自らを維持するための生態系を持たないで侵入してくる殺戮種に対して寛容である必要はありませんが。数世代後にはより豊かな均衡を保てるようになるのだろうか。リチャードは問いかけます。私たちは忘れてしまいがちですが、イギリス原産だと思っている種の中には、元々ケルト族やローマ人によって持ち込まれた種もあるのです。

数え切れないほどの花の名前が出てくるのが嫌でなければ、そして、それがどんな花なのか調べるのが苦にならないのなら、この本はとても興味深い一冊です。滑らかで読み応えのある文章です。リチャードが花や植物について著した著書はこれだけではありませんし、彼にはラジオのコメンテーターとしての経験があり、それが、読者をひきつける文章力に繋がっています。ここで、私の好きな、ジョン・ラスキンの引用を紹介します。

「私たちは普段ポピーを地味な花だと思っています。しかし、ポピーは最も透明度が高く、最も繊細な花なのです。それはまるでガラスに描かれた花のようです。太陽の光にかざしたときの輝きはまるで別の花を見ているようです。光に照らされた、あるいは光に透けて見るポピーは、炎のようです。その炎は、ルビーのように風さえも暖めるのです。」  
また、リチャード自身はこう述べています。

「蜜蜂蘭は陶器とビロードでできた装飾のようだ。太陽の日差しに不思議な生命力を吹き込まれている。」

最後に、リチャードは都市の雑草を生きた落書きだと喩えています。ときに生意気で世間慣れしていて、不動産開発業者の一步先を生きています。

訳: 小越二美 (Fumi Kogoe)